




| | |
|--|---|
|  Data | 2023-89 |
| 監督 | クリストファー・マッカーリー |
| 出演 | トム・クルーズ/ヘイリー・アトウェル/ヴィング・レイムス/サイモン・ペッグ/レベッカ・ファーガソン/ヴァネッサ・カービー/イーサーイ・モラレス/ポム・クレメンティエフ/ヘンリー・ツェニー |

👁️👁️ みどころ

1954年生まれのジャッキー・チェンは還暦後も身体を張ったアクションを続けていたが、それは1962年生まれのトム・クルーズも同じ。『ミッション：インポッシブル』シリーズでは、トムが魅せる華麗で強烈な“バイクアクション”が最大の売り。したがって、『デッドレコニング PART ONE』と題された、AI（人工知能）理論とその“暴走”のキーを握る“2つの鍵”をめぐるストーリー展開はクソ難しいものの、その解決は結局、肉弾戦、カーアクション、そしてバイクアクションになるので、それに注目！

しかし、『デッドレコニング』という、誰にもわからないタイトルは如何なもの？また、“2部作構想”も如何なもの？美女たちが次々と登場してくるのは楽しいが、登場人物が多すぎると、ストーリーがわからなくなってくる危険もある。しかも『PART ONE』と『PART TWO』の“完結性”と“連続性”を両立させるのは至難の技だ。

固定ファンの根強い支持があるのは心強いが、同時に公開されたハリソン・フォード主演の『インディ・ジョーンズ』シリーズが第5作で完結した今、本作は『トップガン マーヴェリック』（20年）と同じような大ヒットとなるの？それに注目しつつ、『PART TWO』にも期待したい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ 『トップガン』も最新作！本シリーズも最新第7弾が！ ■□■

トム・クルーズといえば、若き日は『7月4日に生まれて』（89年）、『遙かなる大地へ』（92年）等のハンサムを絵に描いたような名作があり、アクションスターとしては『トップガン』（86年）とその後のシリーズ、『ミッション：インポッシブル』（96年）とその後のシリーズが双璧だ。そして、異彩を放っている出演作が、ナチス将校役に扮した『ワ

ルキューレ』(08年)、『シネマ22』115頁)だった。

『トップガン』シリーズの最新作『トップガン マーヴェリック』(20年)、『シネマ51』12頁)では、戦闘機パイロットを養成する最高機関「トップガン」の教官として戻ってきた、還暦間近のマーヴェリック(トム・クルーズ)があつと驚く見事な大活躍を見せてくれた。彼は1962年生まれだから既に還暦を過ぎたが、中国の1954年生まれのジャッキー・チェンが、還暦前後に『1911』(11年)、『シネマ27』81頁)、『ライジング・ドラゴン』(12年)、『シネマ30』243頁)、『ポリス・ストーリー／レジェンド』(13年)、『シネマ34』429頁)、『ドラゴン・ブレイド』(14年)、『シネマ37』251頁)、『スキップ・トレース』(16年)、『シネマ40』未掲載)、『レイルロード・タイガー』(16年)、『シネマ40』172頁)、『カンフー・ヨガ』(17年)、『シネマ41』151頁)、『ポリス・ストーリー／REBORN』(17年)、『シネマ43』未掲載)、『ナイト・オブ・シャドウ 魔法拳』(19年)、『シネマ46』未掲載)等で、若き日に勝るとも劣らないアクションスターとして大活躍しているのと同じく、本作でも大活躍!『ミッション：インポッシブル』の大元になったアメリカで大人気のTVドラマ『スパイ大作戦』でおなじみのシーンは、AI(人工知能)が活躍する今でも、本作冒頭のシーンに登場するカセットテープだが、これは必要な言葉をしゃべった後5秒以内に自動消却されてしまうところがミソ。さあ、国際通貨基金(IMF)ならぬ、極秘任務を遂行するスパイ組織(IMF)の一員として、今なお尽力しているイーサン・ハント(トム・クルーズ)に今回与えられた任務とは?

■□■阪神Tの目標は“アレ”! 本作のテーマは“それ”! ■□■

本作冒頭は、厚い氷の下を潜航中の、ロシアが誇る最新鋭原子力潜水艦セヴァストポリの中。セヴァストポリは実験用AIによる独自の推測航法(デッドレコニング)の試験潜航中だが、このAIは2つの特殊な鍵で嚴重に潜水艦内にロックされているらしい。ソナーに反応しない潜水艦は文字通り“神出鬼没”状態になるから、世界中のどの海の中からでも原爆付きのミサイルを発射できる。そのため、アメリカをはじめ西洋民主主義諸国がセヴァストポリに恐れ戦いていたのは当然だ。こりゃ面白そう!『レッド・オクトーバーを追え!』(90年)も、『U-571』(00年)も面白かったが、“潜水艦モノ”が面白いのは常識だ。しかし、本作は“潜水艦モノ”ではなく、トム・クルーズ主演の『ミッション：インポッシブル』シリーズではなかったの?

そう思いながら観ていると、セヴァストポリから発射された魚雷が“暴走”し、標的だったはずの敵(アメリカ)潜水艦を外してしまったばかりでなく、逆に自艦を襲ってきたから、アレレ……。セヴァストポリは暴沈し、乗務員たちは厚く張った氷の下にプカプカと。あの2つの鍵を首にかけた乗組員の死体も分厚い氷の下に……。この2つの鍵に託されていた役割は一体何だったの?

2023年、阪神タイガースの監督に就任した岡田彰布監督は「優勝できる戦力が揃っ

ている」と力強く述べた上、守備力を強化するため守備位置の定着化を訴えて、ショートの中野を2塁にコンバートした。さらに、1塁大山、3塁佐藤を固定させ、打順も4番と5番に固定させた。それらが功を奏して(?)ペナントレース前半戦は快進撃を続けたが、そこで老獪(?)な岡田監督は、優勝のことを“アレ”と言い換えたから面白い。そりゃ一体なぜ?何のためにそんな小細工を?

近時、AI(人工知能)の発展はものすごく、囲碁や将棋の世界では既に人間の能力越え・・・?近時は対話型AIである“チャットGPT”の役割(使い方)が大問題になっている。その論点の1つが“AIの暴走”だが、本作では謎のAI“エンティティ”が次々と政府機関や銀行、大企業などに不正アクセスしていく姿が正面から問題提起されるから、それに注目!このAIの“暴走”をくい止め、コントロールするためには、あの2つの鍵が不可欠らしい。そのため、元IMFで現CIAのユーージーン・キトリッジ長官(ヘンリー・ツェニー)は、2つの鍵のありかを探り、それを手に入れるためにイーサンを送り込んだわけだ。イーサンは昔からの信頼できる仲間であるベンジー(サイモン・ペッグ)とルーサー(ヴィング・レイムス)を集め、2つの鍵探しに向かったが、字幕に“それ”と表示されるものの正体は一体ナニ?今年の阪神Tの目標は“アレ”だが、本作のテーマは“それ”(探し)だから、“それ”に注目!

■□■デッドレコニングとは?なぜ2部作構想に?■□■

第95回アカデミー賞で10部門11ノミネート、作品賞、監督賞、脚本賞、主演女優賞、助演男優賞、助演女優賞、編集賞の計7部門を受賞したのが『エブリシング・エブリウェア・オール・アット・ワンス』(22年)、『シネマ52』12頁)。バカ長いタイトルの同作は、“トンデモ脚本”に基づく“ほとんど理解不能”な映画だった。同作は『エブエブ』とか『EEAAO』と略されていたが、本作も『ミッション:インポッシブル デッドレコニング PART ONE』とバカ長いタイトルになっている。

「PART ONE」とされているのは、これまで2作の『ミッション:インポッシブル』シリーズを監督しているクリストファー・マッカーリーが、最初から「次の作品を2本立てにしよう」と考えたためだ。パンフレットには、本作の監督、脚本、製作を務めたクリストファー・マッカーリーのインタビューがあり、そこでは“2部作”にすることの意義と、「PART TWO」への展望を語っているが、そりゃちょっと無謀では・・・?

他方、そもそも「デッドレコニング」って一体ナニ?それが「推測航法」を意味する英語だとわかる日本人は誰一人いないのでは?weblioによれば「デッドレコニング=推測航法」は、次の通り解説されている。すなわち、

ナビゲーションシステムにおいては、常に自車の位置(地図上の地点=緯度・経度)を認知しておくことが基本となる。現在では通常、衛星測位システム(GPS)によって測定が可能であるが、トンネル内や山の陰で測位できないことが起こる。この場合、最後に測

位した地点を基点とし、自車の進行方向と走行距離を蓄積（積分）して現在位置を算出、走行していくことを推測航法と呼ぶ。方位は地磁気センサーやレートジャイロ、あるいは左右輪速度差から、また距離は車輪速センサーや車速センサーから得るが、これらのセンサーはいずれも誤差が避けられず、一般に測位誤差は累積して走行距離の2～3%といわれている。これを地図上のネット情報と比較しながらソフト的に修正するマップマッチングという方法も併用されている。

この推測航法のためにはコンピューターが不可欠だから、その分野で近時、目覚ましい発展を遂げているAI（人工知能）を使わない手はない。そのため、ロシアの最新鋭原潜セヴァストポリには最新のAIによるデッドレコニング（推測航法）が備え付けられていたわけだが、同艦から発射された魚雷が暴走し、自艦を撃沈してしまったのが本作冒頭のシーンだ。なるほど、なるほど。ここまで勉強すればやっと「デッドレコニング」の意味や、本作冒頭のシーンが理解できるが、いくら何でもこりや難しすぎるのでは・・・？

■□■悪役は？仲間？謎の男たちは？美女たちは？■□■

全50作も続いた山田洋次監督の『男はつらいよ』シリーズでは、主人公のフーテンの寅さんこと車寅次郎と、妹のさくらを中心とする、葛飾柴又に住むファミリーや隣人たちの人間関係は、日本人なら誰でも完璧に頭に入っていた。したがって、「おぼちゃん！」といえは〇〇、「タコ！」といえは△△だとすぐに思い浮かぶはずだ。

それに対して本作では、敵役として登場するガブリエル（イーサイ・モラレス）と美女のパリス（ポム・クレメンティエフ）はすぐにわかるし、仲間として登場する前述したベンジーとルーサーはすぐにわかるが、スパイ映画特有の“謎の男たち”は、誰が味方で誰が敵か、また、それぞれどんな役割を果たしているのかが正直言ってよくわからない。

他方、任務を開始したイーサンが最初に出会う、眼帯姿の美女イルサ・ファウスト（レベッカ・ファーガソン）や前作『ミッション：インポッシブル／フォールアウト』（18年）『シネマ42』未掲載）で重要な役所を果たした武器商人の美女ホワイト・ウイドウ（ヴァネッサ・カービー）の2人は本作でどんな役割を？さらに、女スリ（？）として本シリーズに初登場し、抜群の能力を見せる美女グレース（ヘイリー・アトウェル）やマリー（マリエラ・ガリガ）はどんな役割を？本作では、これら4者の美女たちが4者4様の美しさと際立ったキャラを見せつけながら、それぞれ複雑な役割を演じるのでそれに注目だが、ハッキリ言って、そのストーリーもわかりづらい。

■□■テーマはAIでも、見どころはカーチェイスと肉弾戦！■□■

「スパイもの」はもともと複雑に入り組んだストーリーが多い上、『デッドレコニング PART ONE』と題された本作では、AIに絡むクソ難しい概念や会話が展開されるので、とにかく難しい。囲碁や将棋ならいくら難しくてもAIと人間との勝負は面白いが、最新鋭原潜の“デッドレコニング”のコントロールを失わせた2本のキーの役割について、私はサッパリわからない。

他方、もともと『007』シリーズの人氣が、初代ジェームズ・ボンド役を演じたショーン・コネリーの魅力を中心に形作られていたのと同じように、『ミッション：インポッシブル』シリーズの魅力も、トム・クルーズの魅力、とりわけ彼が演じるド派手なアクションの魅力で成り立っていたから、本作でもそれを踏襲する必要がある。そのため、思わず「これは潜水艦モノ！」と思わせた冒頭のシーンから、複雑に入り組んだ登場人物たちによる、ワケのわからない(?)複雑な2つの鍵の争奪戦というストーリー展開の中でも、結局本作の見どころはカーチェイスと肉弾戦ということになる。すなわち、本作の見どころの第1は、ローマの街並みで展開される小型の黄色い“フィアット500”によるカーチェイス、第2は、ジャッキー・チェンの『レイルロード・タイガー』を彷彿させるオリエント急行での列車アクション、そして第3は、トム・クルーズの“お家芸”ともいえるバイクアクションだ。

たしかに、トム・クルーズ演じるこれらのド派手なアクションは手に汗握る、ハラハラドキドキの展開を見せてくれるが、私にはそれほどの感激はなかった。パンフレットでは、本作で見せるトム・クルーズのバイクアクションが最長になったことを褒めそやしているが、それってそんなにすごい事なの・・・?

映画におけるアクションの面白さや重要性を否定するつもりはないが、本来はストーリーの面白さで勝負すべきではないの?私はそんな思いが強かったから、PART ONE だけで156分という長さも、いささかうんざり・・・?

■□■任務は達成しても女たちは?第2部への展望は?■□■

『007』シリーズでは、“ボンドガール”と呼ばれる美女たちが、敵味方を問わず多数登場していたから、私はストーリー展開以上にそれが楽しみだった。それが最高潮に達したのは、『007は二度死ぬ』(66年)。当時、日本が世界的に通用する女優として『007』シリーズに初登場させた女優が浜美枝だった。『007』シリーズでは、ボンドガールたちの何人かは“使い捨て”のようにジェームズ・ボンドに代わって犠牲者になっていたが、さて『ミッション：インポッシブル』シリーズにおける、イーサンの前に現れるたかさんの美女たちは?『デッドレコニング PART ONE』と題された本作では、そんな美女たちの悲劇的な結末が再三語られるので、そんな点にも注目しながら、イーサンが任務達成のために懸命に頑張る姿に注目したい。

他方、『007』シリーズのジェームズ・ボンド役は全25作の間に次々と俳優が代わったが、『ミッション：インポッシブル』シリーズは、トム・クルーズの一人舞台。しかして、前述のとおり、『デッドレコニング PART ONE』と題された本作と、『デッドレコニング PART TWO』が2部作になることについて、クリストファー・マッカーリー監督はインタビューの中で次の通り語っている。すなわち、

私たちは『ミッション〜』シリーズ全体で自分たちが定めたルールを守るだけでした。

それは、どの映画も独立した作品でなければならない、というもの。観客に、一つの映画から精神的に離れて、別の映画を思い出してもらうなんてできません。それは魔法を解いてしまうことになると思うのです。だから、『デッドレコニング PART ONE』は、それだけで完結し、満足のいく結末を迎える映画でなければなりませんでした。もし『PART TWO』がなかったとしても、大丈夫のように終わらせる必要がありましたし、同時に、その冒険の続きが欲しくなるような終わり方にもしなければならなかったのです。そして、『PART TWO』は、『PART ONE』を観たかどうかにかかわらず、単独で成立するものでなければなりません。

しかし、それをどうやって実現するの？「PART ONE」だけでも登場人物が膨れ上がり、「デッドレコニング」とAIを巡る最初の問題提起と、それをストーリー上で展開させる2つの鍵の争奪戦は複雑でわかりにくいものになっていた。さらに、それにもかかわらず、結局「PART ONE」の見どころはカーチェイスと肉弾戦ということになれば、『デッドレコニング PART ONE』のレベルは少し落ちるのでは？もしそうだとすると、『デッドレコニング PART TWO』への展望はかなり難しくなるのでは？

私にはそんな不安がいっぱいだが、『インディ・ジョーンズ』シリーズのハリソン・フォードと違い（？）、トム・クルーズはまだまだ若く元気いっぱい。したがって、『デッドレコニング PART TWO』でも見せてくれるであろう、彼ならではのアクションに期待しつつ、その脚本にも期待したい。

2023（令和5）年7月26日記